

禪の友

ZEN no Tomo

2
2023





ご本山だより
 大本山永平寺【善財の一步】

大本山永平寺
 福井県吉田郡
 〇七七六・六三・三一〇二



十一月初旬から今月半ばまでの約三カ月間は、冬の「安居」と呼ばれる修行期間です。元はインドの雨季において、お釈迦さまが弟子と共に精舎に留まり坐禅修学したことから始まっており、仏教伝来の歴史の中で冬にも行じるようになりました。この期間が明けますと再び道場の行き来が可能となり、新たな修行者が門戸を叩く時節となるのです。

「家庭厳峻、陸老の真門より入るを容さず。鎖鑰放閑、遮莫、善財の一步を進め来るに。」

山門には、永平第五十四世・博容出家禪師の揮毫とされる簾額があり、上山者たちを迎えます。「永平寺は出家道場である。故事に曰く、陸老中という大力量の者であったとしても、一代発心の出家の者でなければ足を踏み入れることは許されない。しかしながら真実の道心をもって求めるならば、そ

れを妨げるものは何一つない。『華嚴經』には、弥勒菩薩が善財童子の発心を認め、求めに応じて大楼阁の門を開き仏智海へと導いた、という教えもあるのだから」。

立春を過ぎたとはいえまだ残る雪と厳しい寒さの中、全国からの修行志願者たちが、おのおの指定された日に到着します。集まった上山者たちはそれぞれが異なる境遇にあり、様々な思いを胸に抱いて来ております。その心がいかなるものなのか、本当のところは私たちの眼で見ることにはかえません。到着の木版を打ち鳴らし、入門が許されるまで自分の足で山門に立ち、そしてそこから一步前へと踏み出すかどうか。小さな一步が私たちの長い人生を切り開き、道を作ってゆくように、覚悟を定め、我が心、斯く如くなり！と歩みを進めたその瞬間から、彼らの永平寺での修行が始まるのです。



ご本山だより

大本山總持寺

【節分追儺式と涅槃会】

大本山總持寺

神奈川県横浜市

☎〇四五・五八一・六〇二一



「寒行僧の一行の声街をゆく」室岡青雨撰

寒中修行である寒行托鉢が終了し、二月三日には春の訪れを告げる「節分追儺式」が大祖堂で行われます。例年、福男・福女、著名人をお迎えし盛大に行われておりましたが、一昨年からは感染症の為、山内のみで御祈禱法要が勤められております。今年も第八波の影響を考慮しての開催になるかと思われます。

千畳敷きの大祖堂が参拝者で埋め尽くされる日が戻ってくることを願うばかりです。

そして二月十二日から十四日にかけてはお釈迦さまの「涅槃会報恩撰心」が行われ、十五日には「釈尊涅槃会」法要が行われます。

「涅槃図に望の月あり照らしけり」という鈴木栄子さんの俳句がありま

すが、これですぐに思うのは僧侶であり歌人であった西行法師が『山家集』で「ねがはくは花のしたにて春死なんそのきさらぎの望月のころ」と詠んだ歌はあまりにも有名です。そのきさらぎの望月のころとはまさにお釈迦さまが入滅された二月十五日であり、太陽暦では三月中旬を示し「私も願うことには桜の咲いているもとで、それもお釈迦さまが入滅された二月十五日の満月の頃に」とその生涯の感慨を示しているのです。總持寺でもお釈迦さまの遺徳と報恩の為に毎年修行されるのがこの「涅槃会報恩撰心」と「釈尊涅槃会」なのです。

これらが終わると修行僧は一定の節目をつけそれぞれの道に進み、また入れ替わるように新しい修行僧が道を求めて上山してくるのです。

選・坊城俊樹

虎河豚やええかええかと袋競り

島根県 藤江 堯

評 この競りは、袋の中の競り人の指を仲買人が

何本握るかによって値段を決める方法という。虎河豚なのでさぞや豪華な値がつくのだろう。「ええか」という催促のかけ声もまた臨場感があつて愉快。これはおそらく日本海の最高品質の虎河豚に違いない。

時雨るるや彼の狼の終焉地

奈良県 竹村 和成

評 「彼の狼」といえば、かつて日本で最後に捕獲

された奈良県吉野のニホンオオカミを思い出す。作者のご住所から察してもそうであろう。降り続く現今の時雨はその美しい獣へ降る時雨と美しくシンク口する。そしてその哀しみの余韻もまた現代へと響く。

◆ 人恋し寒月食の波の音 三重県 荻屋 奈良美

◆ 猫なで声ふところにみて冬ぬくし 兵庫県 内藤 昭子

◆ 山茶花を生けて華やぐ廬かな 宮城県 高橋 静子

◆ 天空は曼陀羅の雲文化の日 大阪府 花谷 広文

◆ 百舌鳴くやバンジージャンプの最下点 茨城県 山口 恭弘

◆ 檜皮葺きの葺しつとり冬の雨 神奈川県 池亀 恵子

◆ 短日の風を背負うて行商女 大阪府 柏原 才子

◆ 春を待つところにやかん沸ひてみる 三重県 西村 廣視

◆ ともかくも大樹仰ぎて秋惜む 島根県 俵 保恵

◆ 人知れず線路点検月満つる 秋田県 後藤 榮子

選者吟

高虚子へ冬の蝶とは届かざる 俊樹

作句小見 「高虚子」とは高浜虚子のことを敬つて付ける呼称。俳壇

で見られないかもしれない。しかしこの冬の蝶は何としてもその天空へ羽搏きたいのだがどうしても届かない。何故ならこの切ない蝶はもう寒さに凍えやがて死にゆく運命にあるから。

選・長澤 ちづ

廃屋のかつての栄華語るがに今宵邯鄲は
げしく啼けり

北海道 加藤 智子

評 かつて栄華を誇った屋敷跡か。今は廃屋となり虫が鳴き集いている。邯鄲は淡黄緑色の虫の名。その高く激しく鳴く虫の音に栄華を語らせ趣きのある一首となった。

教え子が「炊いでけらいん、おれの作」
新米差し出すたくましき手に

宮城県 阿部 澄江

評 二、三句の括弧の中は、土地の言葉なのだろう。素朴な響きが青年の実直さを表している。収穫した新米を誇らしげに作と言い、その自信に満ちた様子が清々しい。教え子が立派に農業を継承していることに喜びを感じる作者である。

◆ 夜の霜びつしりまとひて落ちみたるかりんを拾ふ指のつめたさ

岩手県 阿部 照子

◆ 豆を選る孤独な作業に添うごとく痩せつぽトンボ行つたり来たり

秋田県 小松 紀子

◆ 上総なるすゑ葉の宿の篠原を日交ぜに鳴さぬ冬の鶯

千葉県 野中 修次

◆ 傍らを過ぐる老女が躓きぬ二人の会話一瞬止まる

茨城県 田口 昭子

◆ 種孕み繁みの中に林立すタカサゴユリは風の子となり

山口県 橋本 美知子

◆ ふるさとの川に還りて海のいろ捨てたる鮭かブナと呼ばれて

北海道 菅原 三江子

◆ うちの子になりて十年かめ吉は夫なきあとの吾の慰め

東京都 長谷川 瞳

◆ 廃校の施設されたるわびしさよ更に悲しい「止まれ」の標識

三重県 西村 廣視

◆ わが手にて服を着られる喜びよ傷癒えし身に秋風清し

兵庫県 待元 明子

◆ 貧乏柿の皮剥きて干す柔らかくなるまで待てずつまみし戦後

山口県 濱田 道子

人も犬も疲れて夏を籠るとき大き傘なす庭の芽の葉

ちづ

選者誌

作歌小見

野中さんの一首の「日交ぜ」とは「一日置き」、隔日のこと。友の化身かと「冬の鶯」の鳴き声を聞いている。濱田さんの「貧乏柿」は種の多い柿のことで実が少ないものを言うらしい。戦後の食糧難の厳しさが思われる。